

人をつなぎ 未来をつなぐ  
明石のコミュニティ・スクールだより

## KOMIKOMISUKUSUKU 未来への教育を考える特別号

明石市教育委員会事務局学校教育課

mail : gakkyo@city.akashi.lg.jp



TwitterQR  
未来への教育を考える特別号

No.6 2021.2.9

### 「日本人口推移推計」からコミュニティ・スクールの意義をとらえる

グラフを見て、難しい分析は置いておき・・・

少子高齢化やそれに伴う労働人口の減少、バブル崩壊からの景気低迷、経済のグローバル化、在留外国人の増加・・・ずいぶん前から今後の社会について予想されてきたことです。もちろん、わたしもそんな時代がやってくることを情報としては知っていました。問題は、そういった社会の変化や課題を自分の本職である「教育」と結び付けていなかったことにあると考えています。

これまで、子どもを取り巻く環境は目まぐるしく変化してきましたが、その変化に比べて、教育の変化はさほど大きくなかった、それが実感です。実際、10年ごとに改訂する学習指導要領は、先の社会を見越して必要な教育について示されたものです。しかし、われわれ教師がその学習指導要領の解釈を社会の変化や課題を踏まえて行ってきたか？ 全教職員がそれを基に共通理解して教育にあたってきたか？ そのような視点でとらえれば、少なくともわたし自身のとらえは甘かったと感じています。

「人生100年」といわれる時代になりました。0歳から100歳、生まれてから死ぬまでの人間の成長(学び)を一本の線に例えて考えてみると、義務教育の部分は9年間という短い期間(部分)です。しかし、それは就学前教育からつながってきたものであり、小、中、高、大学、社会へとつなげていく一本の線上の貴重な通過点です。そう考えれば、小学校教師であるわたしは、就学前教育や中学校教育はもちろんのこと、高校教育、大学教育、子どもたちの未来に出会うであろう社会の変化や課題を小学校教育と結び付けて考えなければなりません。となれば、小中一貫教育の推進は必然であり、その後、子どもたちが地域や社会で生きていく期間が長いことを考えれば、コミュニティ・スクールの推進もまた然りです。一本の線でつながっている人間の成長(学び)の中で、地域や社会を担う人材をどう育てていくか？ これからの社会を生きるために必要な資質・能力は？ ということ、同じ線上にある学校、保護者、地域が共通理解すること、協働して教育にあたることはまさに必然なのです。

「開かれた学校」もずいぶん前から言われてきました。果たしてわれわれは何を開いてきたのか？ おそらく学校の活動の中で地域に協力してもらうことがほとんどだったのではないのでしょうか。学校中心の考え方が今もなお一般的であり「地域は学校を支える存在である」という考え方が根強く、「開かれた学校」の本質がなかなか浸透していないのが現実だと思います。コミュニティ・スクールの推進の中で、「いい学校づくり=いいまちづくり」という言葉を挙げています。これからは学校と地域が対等になり、「学校を核とした地域づくりの推進」という、学校と地域の新たな関係を構築する必要性を謳っています。

「教育」は学校だけであるものではありません。学校運営協議会の話し合いの中で、必ず「子どもたちがどうなってほしいか」地域と目標や課題を共有できるはずですが、学校教育目標に地域との連携を掲げている学校はほとんどですが、地域は学校教育目標を知っているでしょうか。「地域でこういう子どもたちを育てたい」という目標を共有した地域は、「こういう子どもたちを育てるならこういう地域にならなければならない」という責任を持つことになるはずで、それは自ずと「いいまちづくり」にもつながっていきます。子どもを軸にしてまちをつくっていく、それがコミュニティ・スクールの本質であると考えます。

「社会に開かれた教育課程」は、「未来を創る」ために必要な資質・能力を育むための教育課程であり、学校の願いとともに保護者や地域の願いが込められた教育課程でなければなりません。それは「いい学校づくり」だけにとどまらず「いいまちづくり」につながると確信しています。だから「熟議」は必要なのです。今、なぜコミュニティ・スクールなのか？ それはわたしたちが生きる今の社会、子どもたちが創るこれからの社会に必要な仕組みだからです。コロナ禍で難しいことがあるかもしれませんが、考えることはできます。計画することはできます。意識を高めることはできます。これからの教育について、教職員が学校を越えて地域の方々と語ることから始めなければなりません。また、これからの地域や社会について、子どもたちが地域の方々と語ることから始めなければなりません。（学校教育課 北迫 嘉幸）

北迫主幹、お忙しい中ありがとうございます。

北迫主幹は“少子高齢化やそれに伴う労働人口の減少、バブル崩壊からの景気低迷、経済のグローバル化、在留外国人の増加・・・ずいぶん前から今後の社会について予想されてきたことです。もちろん、わたしもそんな時代がやってくることを情報としては知っていました。問題は、そういった社会の変化や課題を自分の本職である「教育」と結び付けていなかったことにあると考えています。”と書き始められています。これも前号で寺田先生が書かれていた“心の根底には「今の状態がそれほど大変でない」と感じている現実があるのだと思います。今の状態が明日も明後日も続くと思っているのかもしれませんが。（他人事のようですが・・・）”とつながってきます。私もこれまで“少子高齢化社会”、“急激な社会の変化の中で”、“多様な価値観の中で”、“急速に情報化、グローバル化が進む社会”といった文言は管理職試験や学校だより等の中で良く使ってきましたが、“ワガゴト”としてとらえているふりをして、心の中で“今の状態が明日も明後日も続く”いや“変化しないでほしい”と願っていたのだと思います。コミュニティ・スクールコーディネーターとして今の仕事を始めて2年が終わろうとしていますが、コロナ禍前は正直今の状態が明日も明後日も続く”といった気持ちがあったように思います。“われわれ教師がその学習指導要領の解釈を社会の変化や課題を踏まえて行ってきたか？”、“開かれた学校”もずいぶん前から言われてきました。果たしてわれわれは何を開いてきたのか？”とありますが、どれも耳が痛いことばかりです。大きな負債を残してきてしまったというのが実感です。今、一歩踏み出さないと“この社会の変化の中で学校は？”と危機感を持ちます。北迫主幹の最後の段落が今、やるべきことではと思います。

先日ツイッターで孫正義さんがこんなつぶやきをされていました。

“進化しない者は既に退化している 何故なら周りが全て進化している”

“今の状態が明日も明後日も続く”のままでは学校という仕組が必要でなくなってしまう時がくるのではという危機感が。皆さんはいかがですか。 （文責：北本）